顕現後第5主日　ルカ5章1―11節

［直訳］

1 だが起こった
　群衆が彼へ押し寄せ　そして　神の言葉を聞くことにおいて
　そして　彼は　いた　立って　ゲネサレト湖のわきに
2 そして　彼は見た　二つの舟が　立っているのを　湖のわきに。
　だが漁師たちが　それらから　出て来て、
　洗っていた　網を。
3 だが乗り込んで　舟の一つの中に、ところの　シモンのものであった、
　彼は頼んだ　彼に　陸から（離れて）　少し漕ぎ出すことを、
　だが座って　舟の中から　彼は教えていた　群衆を。
4 だが彼が話し終えたとき、彼は言った　シモンに向けて、
「あなたは漕ぎ出しなさい　深みの中へ、
　そして　あなたがたは降ろしなさい　あなたがたの網を　捕獲のために。」
5 そして　答えて　シモンが　言った、
「先生、　全体の夜を通して　苦労して
　なにひとつ　私たちは獲れなかった。
　だがあなたの言葉の上に　私は降ろすでしょう　網を。」
6 そして　このこと（＝言葉）を　おこなって、
　彼らは閉じ込めた　魚の大量の群れを、
　だが破れていた　彼らの網が。
7 そして　彼らは合図した　他の舟の中の共働者たちに
　来て　彼らを助けるようにと、
　そして　彼らは来た、
　そして　彼らは満たした　両方の　舟を、
　その結果　沈むことが　それらが。
8 だが見て　シモン・ペトロが　ひれ伏した　イエスの膝に　言いながら、
「去ってください　私から、
　というのは　罪深い男で　私はある、　主よ。」
9 なぜなら驚きが　捕らえた　彼を　そして　彼と一緒のすべての者たちを
　魚の捕獲の上に　ところの　彼らが獲得した、
10 だが同じで　ヤコブもヨハネも、ゼベダイの息子たち、
　ところの　仲間たちであった　シモンにとって。
　そして　言った　シモンに向けて　イエスが、
「恐れるな。
　今から　人間を　あなたはあるだろう　捕らえて生かす者で。」
11 そして　着岸させて　舟を　陸に、
　手放して　すべてを　彼らは従った　彼に。

［新共同訳］

1 イエスがゲネサレト湖畔に立っておられると、神の言葉を聞こうとして、群衆がその周りに押し寄せて来た。2 イエスは、二そうの舟が岸にあるのを御覧になった。漁師たちは、舟から上がって網を洗っていた。3 そこでイエスは、そのうちの一そうであるシモンの持ち舟に乗り、岸から少し漕ぎ出すようにお頼みになった。そして、腰を下ろして舟から群衆に教え始められた。4 話し終わったとき、シモンに、「沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をしなさい」と言われた。5 シモンは、「先生、わたしたちは、夜通し苦労しましたが、何もとれませんでした。しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましょう」と答えた。6 そして、漁師たちがそのとおりにすると、おびただしい魚がかかり、網が破れそうになった。7 そこで、もう一そうの舟にいる仲間に合図して、来て手を貸してくれるように頼んだ。彼らは来て、二そうの舟を魚でいっぱいにしたので、舟は沈みそうになった。8 これを見たシモン・ペトロは、イエスの足もとにひれ伏して、「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです」と言った。9 とれた魚にシモンも一緒にいた者も皆驚いたからである。10 シモンの仲間、ゼベダイの子のヤコブもヨハネも同様だった。すると、イエスはシモンに言われた。「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる。」11 そこで、彼らは舟を陸に引き上げ、すべてを捨ててイエスに従った。

①構成

ⓐ 1―3 節

1―2 節前半、「だが起こった…彼は見た…」はルカの好む構文である。ここでは、主文章は 2 節一行目、「彼は見た…」である。「舟が立っている」は「立ち止まっている・碇泊している」の意味。イエスが舟から群衆を教えたことをマタイもマルコも語っているが、4―11 節はルカだけが伝える出来事である。マタイやマルコでの「舟」は言葉が語られる説教壇としての役割を演じているが、ルカでは言葉が出来事となる舞台にもなっている。

ⓑ 4―5 節

イエスは「あなたがたは降ろしなさい」と二人称複数形を用いているので、舟にはシモン以外にも漁師が乗っている。5 節のシモンの答えでは、「…私たちは獲れなかった。…私は降ろすでしょう」というように、動詞が複数形から単数形に替えられている。

Ⓒ 6―7 節

6 節の「破れていた」はここでは「破れそうになった」の意味であり、「沈むこと」も「沈みそうになった」の意味。大漁が強調される。

ⓓ 8―10 節前半

ペトロは大漁を「見て」、ひれ伏し「罪深さ」を告白する。大漁という恵みが罪を自覚させる。

ⓔ 10 節後半―11 節

イエスはペトロに「人間を捕らえて生かす者」になると告げる。ペトロたちはイエスの言葉を受け入れて、イエスに従う。

②舟に乗るイエス（1―3 節）

ⓐ 1―2 節前半はルカの好む構文であり、これは「群衆が彼（イエス）へと押し寄せ、神の言葉を聞く間に、そしてイエスがゲネサレト湖畔に立っていた時に、イエスは湖畔に二つの舟があるのを見た、という事が起こった」という意味になる。

ⓑこの舟から漁師たちは上がり、網を洗っていたが、彼らに代わってイエスがその一つに乗り込み、少し漕ぎ出させて、舟から群衆に教えた。しかし、イエスが舟に着目したのは、説教壇を必要としたからだけではない。他にも理由がある。それを語るのが、ルカだけが伝える 4 節以下である。

Ⓒ「神の言葉」はルカの好む表現。マタイ・マルコ・ヨハネはこの表現をそれぞれ一度しか用いないが、ルカ文書では合計 18 回（福音書で 4 回、使徒言行録で 14 回）使っている。使徒言行録での「神の言葉」はほとんど「使徒によって告げられるキリストに関する使信」を意味する。ここではイエスが告げる使信を表している。ルカは、イエスが告げる使信と使徒が告げる使信とを同じ表現を用いることによって、キリスト教共同体の使信の根源がイエスの教えにあることを示している。しかし、表現自体が表しているように、イエスの教えも使徒の使信も最も深い根源は神の言葉にある。「神の言葉」とは、神に関する言葉というよりは、神から来る言葉の意味である。

ⓓ網を打つのは昼間、浅瀬に立って行う作業であり、貧しい漁師の漁法であったが、ルカが描くのは、夜、舟で沖に出て、網を仕掛けており、比較的裕福な漁師の漁法である。しかし、ルカの関心は漁師たちの裕福さではなく、イエスの「言葉（レーマ）」が引き起こす奇跡にある。

ⓔルカでは、漁師として最初に名指しされるのはシモンだけで、イエスが乗り込む舟もシモンの舟である（3 節）。このように、ルカではリーダーとしてのシモン・ペトロの姿に力点が置かれている。シモンを除く漁師の名が明らかにされないのは、ルカにとって、誰がイエスに従ったかということよりも、何がイエスに従わせたかが重要であるからだろう（10 節になって初めて、ヤコブとヨハネは登場するが、アンデレは最後まで名指しされない）。

③言葉に従うペトロ（4―5 節）

ⓐ 4 節の「あなたがたは網を降ろしなさい」は二人称複数形であるから、舟にはイエスとシモンの他にも漁師が乗っていたことになる。その漁師たちにイエスは沖に出て、網を降ろすようにと指示したのだが、この指示は漁師たちを驚かせたにちがいない。太陽が昇った今、もう魚は獲れないに決まっている。経験を大事にする漁師たちの間には、少々、白けた思いが流れたであろう。シモンはそんな彼らの思いを代弁し、「夜通し苦労しましたが、私たちは何も獲れませんでした」と述べる。

ⓑここでの「獲る」は一人称複数形である。しかし、シモンは続いて「私は網を降ろしてみましょう」と述べるとき、一人称単数形の動詞に替えている。複数形から単数形への交替は、網を降ろしても無駄だと決めこむ漁師と、それでも網を降ろそうとするシモンとの対比を表しているだろう。シモンが網を降ろすのは、漁師の経験や常識に立ってのことではない。経験や常識から考えれば、獲れるはずがない。彼がそうするのは、「あなたの言葉（レーマ）の上に」立つからである。シモンは自分の経験や常識を捨て、イエスの言葉に従う。

④大漁（6―7 節）

ⓐイエスの言葉の通りに行うと、加勢を頼むほどの大漁になる。ルカでの「舟」は言葉が語られる説教壇であるだけでなく、言葉の働きを体験する場でもある。ちなみに、「舟」は教会の象徴にもなりうる。教会は言葉の上に立つ共同体であり、言葉が語られる場であると同時に、その働きを実際に体験する場でもある。

ⓑレーマという単語には、「語られること・言葉」と「事柄・出来事」という二つの意味がある。イエスが語った言葉（レーマ）は、出来事となってシモンたちの目の前に現れる。大漁という出

来事はイエスの言葉によって引き起こされ、その驚くべき出来事にはイエスの言葉が響いている。

⑤告白するペトロ（8―10節前半）

ⓐイエスの言葉の力を目撃したシモンは、畏敬の念に捉えられ、イエスの前にひれ伏す。5節ではイエスを「先生」と呼んでいたシモンだが、この8節では「主よ」と呼びかけ、「私から離れてください。私は罪深い者なのです」と告白する。それは、シモンの目にした出来事が彼の「罪深さ」を直感させるほどに神々しい出来事であるからであり、同時に、恵みに包まれた者は自然と罪の告白を口にできるからである。

ⓑとれた魚に皆が驚いた（9節）。大量にとれた魚によって、イエスの言葉がもたらす恵みの豊かさを強調している。ヨハネ21章1節以下にも、同様の物語がある。そこでは復活したイエスが、何もとれず漁から帰ってきた弟子たちに現れ、舟の右側に網を打つように命じる。弟子たちが網を打ってみると、網を引き上げることができないほどの魚がとれる（ヨハ二一 6）。

⑥使命を持った者（10節後半―11節）

ⓐイエスはシモンに「恐れるな」と語りかけ、むしろ「捕らえて生かす」という使命を与える。ゾーグレオーは、形容詞ゾーオス（生きている）と動詞アグレオー（捕る）の合成語であり、悪い意味で「生け捕りにする」（2テモ二26）と使うこともあるが、ここでは「生かすために捕まえる」、「捕らえて、神の支配の下で生かす」の意味であり、弟子の使命を表す言葉にふさわしい。

ⓑ原文では「人間を」が文頭に置かれ、強調されている。そこで「あなたが捕まえるのは人間だ」とする訳もある。このような解釈に立てば、今まで魚を捕っていたペトロが、これからは、人間を捕らえるようになるだろう、といった意味になる。新共同訳はこのような解釈をさらに押し進め、魚を捕っていた「漁師」から人間を捕る「漁師」に変えられたことを強調する。しかし、原文には「漁師」に当たる言葉はない。原文の分詞形「捕らえて生かす者」は「漁師」にのみ使われる言葉ではない。

ⓒマルコの並行箇所では、ルカと違って、「（人間の）ハリエイス〈漁師〉」という単語が使われている。シモンと兄弟アンデレに「わたしの後について来なさい」と声をかけ、人間をとる「漁師」にしようと述べる17節では、この語はもはや文字通りの意味を越え、イエスの弟子という新たな生き方を表す言葉になっている。並行箇所であるマタイ4章18・19節でも、マルコと同様に、「漁師」から「人間をとる漁師」へと招かれたシモンとアンデレが網を捨ててイエスの弟子となり、新しい使命に生き始めたことをこの語を用いて述べている。しかし、ルカはこの語を用いない。ルカが意識してマルコの「ハリエイス」を避け、ゾーグレオーを使ったのだとすれば、「生かす」の側面が大事にされるべきだろう。いずれにしても、ルカはハリエイス〈漁師〉を使っていないのだから、この語を使った訳は誤解を生み出す。

⑦神の言葉の上に立つ

ルカは最初の共同体が成立していく過程を描写しているが、この過程で強調されるのは、イエスの言葉の力強さである。キリスト者の共同体は人間的な常識や経験に立つのではない。神の言葉の上に立つ。この共同体は恵みの言葉の力をまざまざと目にしているから、罪を告白できる集団である。しかも、使命を与えられた者の集まりでもある。教会は神の言葉の上に立ち、罪を告白し、「生かすために捕まえる」ことを使命としている。